

『アルテアの魔女』第二部

アルテアの魔女と  
南海の王

## 序章 凍りついた心

空から白いものが降りて来ていた。

雨は神の涙、冬にはそれが凍る。だから寒くなれば雪が降るのだと、故郷の伝説ではそう語られていたか。

ならば自分の涙も凍って久しいだろう。だのに冷たい塊になってなお、地面にこぼす事ができない。目の奥で凝り固まって、世に放たれるのを必死に拒んでいるようだ。

人里から遙かに離れたこの地を儀式の場所に選んだのは、これから始まる惨劇の担い手が自分である事を隠す為でもあったが、万が一失敗した時、誰にも知られぬまま一人果てるにはこの山奥が適しているだろうと考えたからだ。

世界に絶望してこれから滅ぼそうとしているのに、世界を気遣う事を忘れていないとは滑稽な話だが、彼女の事を思うと、一縷の望みを託したくなる。

彼女にはもう会えない。心のどこかではそれを納得している。これだけ大陸を巡り、自分の存在を主張しても、彼女は姿を現さなかった。この地を、あるいはこの世を去った。そう考えるのが妥当である。

心と身体に明確な痕を刻んで彼女は消えた。胸に空いた大穴を埋める術は無い。果てしない失意

が自分を悪鬼に変えたとして、誰に責めさせようか。

言い訳を並べ立てながら、四本の柱が屹立する地面に円陣を書き終える。いつの時代のどんな部族が作ったか知らない祭壇に、故郷の言葉で思いつく限りの呪詛を刻んだ。

方法は知っている。後は実践するだけだ。赤い石を唇に当てて、濁り無き言の葉を紡ぐ。

『この身、破滅の使者となりて、大陸に崩壊を。その後に救世主として我は降臨する』  
みしり、と人間にはあり得ない音を立てて身体が変貌してゆくのがわかる。膨れ上がる暗闇に意識が吞まれてゆく。

人の心を失う前に脳裏に浮かぶは、翻る赤銀の髪。振り返る彼女が淡く微笑む。  
その幻を最後にして。

黒き破壊の獣、破神タドミールが、灰色の空に咆哮を放った。

## 第1章 セアクの巫女姫は今

1

アルテアにはいくつかの制約がある。

ひとつ、アルテアを行使するには破神クドミルの血を身に宿している事。

ひとつ、発動には己の血、もしくは破神の血を持つ人間の血を凝縮した『言の葉の石』を必要とする事。

ひとつ、アルテアは濁り無きヒノモトの言葉において行使する事。

セアク皇国の始祖にしてアルテアの巫女ライ・ジュが定めし以上の制約を破った場合、報いを受けるのはアルテアの使用者だけではない。世界そのものが崩壊する大災害を招きかねない。

故にアルテアを用いる者は心せよ。

己が摂理を握っている事を。己の発言一つで世界が動きかねない事を。

覚悟と責任のもとにアルテアを行使せよ。決して自分一人の欲望の為にアルテアを紡ぐ事が無き

ように、心せよ。

遵守できぬ者には、死よりなお辛い報いがあるだろう。  
心せよ。

秋風渡る黄金色の草原に、突風が吹き荒れた。

夕陽きらめくどこか幻想的な光景の中を、全く似つかわしくない黒の影がよつつ、草をなぎ倒しながら低空飛行してゆく。

破獣<sup>カイダ</sup>。破神の血により生み出された破壊の使者は、二元は人でありながら、既に人の姿と心をとどめていない。衝動に駆られるまま他者を襲い、時に数で押し寄せては街を滅ぼしせしめる。

だが、その破獣に果敢に立ち向かう者が皆無という訳ではなかった。

今、破獣を追って走る人間達もその一員である。

「右手方向、二。左に二」

短弓を構えたまま栗毛を揺らして走る少女がぼそりと呟くと、彼女の背後から二人の男達が抜き身の剣を手にして飛び出した。

一人は萌葱色の髪に青灰色の瞳を持つ少年。やんちゃそうな顔に八重歯ののぞく笑みをひらめかせ、「ひゃっほーい」と歓声をあげながら、破獣に向けて身軽に大地を蹴った。

空中で見事な一回転。落下の勢いを劍の威力に乗せて、少年の一太刀は破獣を頭から叩き割った。仲間が倒された事で、心が無いはずの破獣も何かの感情を覚えたのだろうか。二体が苛立たしげな唸り声をあげながらくるりとこちらへ向き直る。

しかし彼らが、仲間を屠った少年の元へ飛びかかる猶予は無かった。透明な刃が一閃、破獣の一匹の首をはね飛ばしたのである。

劍の主は青年だった。全身黒ずくめの衣装に身を包んだ姿はさながら死神のようだ。返り血を頬に浴びて舌打ちしつつも、返す刀でもう一体に向けて劍を突き出す。一撃で心臓を貫かれた破獣は、断末魔の叫びをあげながら黒い霧となって消滅した。

その様を感情のこもらぬ赤い瞳で見下ろしていた死神は、ふと顔をあげると、声を張り上げる。

「——エレ！」

それに応えるように、彼の視線の先で手を掲げてぶんぶん振る者がいた。

「あの馬鹿。呑気してねえで、さっさとやれつての」

青年がぼやく内にも、残り一匹の破獣が手を振った人間に向かってゆく。しかしその人物は動じることなく破獣を待ち受けた。

紅の組紐で左寄りに結った赤銀の髪が、夕陽を受けてことさら赤く輝く。若草色の瞳に凜とした決意を宿したその顔は、まだ年若い少女。彼女は細い鎖を通して首から提げた硝子製の小瓶に唇を

つける。瓶の中で踊っていた赤い液体がすつと流れ出て薄く唇を彩ると同時、なめらかな織物を紡ぐように声が発せられた。

『炎の矢、疾く駆けて敵を滅せよ』

破獣を狙い撃つように掲げた指先から、ふわり、虹色の蝶が舞い上がった。めまぐるしく色を変転させながら漂っていた蝶は、ある瞬間に赤く輝いたかと思うと、鋭い紅蓮の矢に姿を変え、破獣に向けて疾走する。矢が破獣の胸に吸い込まれるように突き刺さると、炎はふわりと黒い体軀を包み込み、一気に燃え上がった。

紅の炎は破獣を焼く事があっても周囲の草原を焼く事は無い。使い手の意のままに摂理が動く。それがこの現象——アルテアに与えられた能力である。

やがて燃え尽きた破獣が黒い塵となり、風に乗って四散すると、少女はふうと息をつき、知らず知らずの内にかいていた額の汗を拭う。そして歩み寄って来る黒服の男に向けて、

「インシオン！」

ぱつと笑顔を輝かせて再び手を振った。

「私、やったでしょう？ もう立派なインシオン遊撃隊の一員ですよね」

返答は、頭を軽く小突く拳ひとつだった。

「調子乗ってるんじゃないよ」

青年が洪面を作つて赤い瞳でじろりと見下ろして来る。

「アルテアも万能じゃねえんだ。発動まで油断ぶっこいてたら隙を突かれてやられる可能性がある  
つて、さんざつぱら言つてるだろうが」

「……すみません」

「えーっ、エレは充分やつてるじゃん」

「もう、遊撃隊にいないと困る戦力」

さつきまでの自信はどこへやら、しゅんと肩をすくめて縮こまる少女を見かねたのか、青年の後  
ろからやつて来た少年と少女が弁護するように意見を述べた。

「ありがとうございます、シャンメル、リリム！」

エレと呼ばれた赤銀髪の少女が嬉々として礼を言うのと、青年が苦虫を噛みつぶしたような表情で  
シャンメルとリリムと言われた二人を振り返る。シャンメルがかつと白い歯を見せて笑い、リリ  
ムは微かに笑んだ後、気恥ずかしそうに視線を明後日の方向に馳せた。

味方を失つた青年が、渋い実を口に含んだような顔のままエレに向き直る。青年とは逆に援護を  
得て勢いづいた少女は、腰に手を当て得意気に胸を張った。

青年が溜息をつくのと、長い前髪が吹き上げられて揺れる。その黒髪は元は後ろも長くてゆるい三  
つ編みにしていたのだが、半年前のとある事件をきっかけに、うなじのあたりですつぱりと切り落



とし、以後伸ばす事をしていない。

「とにかくだ」

大きな手がエレの頭に乗せられ、無造作に撫で回す。

「格下だろうが楽勝だろうが、余裕こくな。慢心は歴戦の戦士も殺す」

呆れ半分の口調で言われ、エレから笑顔が失われた。しょんぼりとした様子で返す。

「……わかりました」

反省したと認識したのだろう、青年がもう一度くしゃりと髪を撫でて手を離した。

歩き出す黒い背中を見つめながら、しかしエレは青年の思惑とは別の事を考えていた。

(また、子供扱い)

頼りがいある手が乗っていた頭にそつと触れる。そこにはまだ温もりが残っているようで、むず

むずした気持ちがかみ上げる。

(インシオンにとって私はまだ、『娘みたいなもの』ですか)

半年以上一緒に旅をして来て、十八歳になった。それでも、青年——インシオンの中でエレの格が上がった気配は一切無い。

二人の生い立ちを思えば無理も無い。インシオンはイシヤナの王族として生まれながら王家を追われ、一軍人として生きる身。対してエレは一般家庭に生まれながらも、かつて得たアルテアの力

によつて、セアク皇国の王姉として暮らして来た世間知らずの娘。環境も、辿つて来た人生も違ひすぎる。

「エレー？」

嘆息した時、シャンメルが陽気に声をかけて来たので、思考の輪から現実に戻り返る。

「町に戻るよ。置いてっちゃうよー」

「今行きます！」

努めて笑顔で手を振り返し、仲間達の後を追つて歩き出す。しかしその胸中ではやはり、もやもやとした気持ちで渦を巻いていた。

少しでも早くインシオンに追いつきたい。彼の隣を並んで歩いて、背中を守る存在になりたい。しかし今のところ、それが果たされる気配は無い。インシオンはひとたび剣を抜けば先陣切つて走つてゆき、エレの追隨を許さない。平時も淡々とした態度を崩さない。その胸の奥には優しさも温かさも秘めている事をエレも知っているのに、なかなかそれを見せてくれない。

それもこれも、自分が頼り無い子供だからだろうか。

(早く一人前になつて認められたいです)

そんな焦りこそが子供の証左である事に気づかず、エレは小走りで皆の後を追う。しかし。

認められない。それが子供の意地だけではなく、インシオンに対する特別な感情が付随している事を認めないほど、エレは幼くもないのだった。

2

「やあ、流石は噂の英雄率いる遊撃隊！ 助かりました！」

インシオン遊撃隊がサシエの町に戻ると、破獣退治を依頼した町長は町の入口までわざわざ一同を出迎えて感謝の意を述べた。周りにはずらりと町民が集い、英雄の姿を一目見ようとこつたがえしている。

「これでまた安心して商人が出入りできますよ」

商売で成り上がったふくよかな町長は、複数の指輪がはまった丸っこい手を揉みにこにこ顔でインシオンのもとへ近寄ると、リド硬貨が詰まった革袋を彼の手に握らせた。

「……約束より多いようだが」

重みだけで察したインシオンが眉根を寄せるのが、傍から見取れる。彼の不機嫌に気づかないのか、町長はゆるみきった顔でなおも揉み手をしながら頭を低くした。

「それはまあ、その、我々の気持ちですよ。できればこれからも、破獣がやって来たらインシオン遊撃隊に是非お願いしたいという、ね」

インシオンの眉間の皺が一層深くなったな、とエレは感じた。彼はこういう扱いをされるのが一番嫌いなのだ。この半年の間に悟った事だ。

「お気持ちはありがたいのですが」

だからエレは、インシオンが怒りを相手にぶつける前に進み出る。小娘が突然口を挟んで来た事に町長が怪訝そうな顔をするが、もう慣れっこだ。平静を保って笑みかける。

「我々も各地を流転する身です。もし次にサシエの皆様が破獣に脅かされる事があった場合、すぐに駆けつけられる保証はどこにもありません。その時に、皆様をがっかりさせたくないので、ですから、とエレは先を繼ぐ。

「無償で契約より多いお金をいただく訳にはまいりません。傷や病を抱えている方はいらつしやいませんか？ そういった方々を私のアルテアで癒す事で、このお代をいただきたいと思えます」それを聞いて、エレが何者かを悟った町長の表情があからさまに変わった。

「これはこれは、『アルテアの魔女』様でしたか！」

大仰に両手を広げて、町長は満面の笑みを浮かべた。

「言葉であらゆる不思議な現象を起こす魔女エン・レイ様の噂は、黒の英雄インシオン殿と共に聞

き及んでおります。そういう事なら、是非お願いしたい！」

インシオンに任せていたら、問答無用で余計な金をつ返して波風を立ててしまう。シャンメルやリムも交渉向きの性格ではない。以前はこういう時に口の得意な人物が遊撃隊にはいたのだが、彼は失われた。必然的にエレが頭を働かせる必要性が出て来たのだ。そしてその際に、エレの能力を対価として提示する事は、大金を用意して来た相手に恥をかかせずに済み、むしろ喜ばせるという点で、実に有用であった。

「じゃあ、俺を頼めるかね」

松葉杖をついた壮年の男性が進み出て来る。

「こないだ屋根に登って修理していたら足を踏み外して、折っちゃったんだ。本当に治るならありがたい」

「それは災難でしたね」

エレはいたわりの言葉をかけながら男性の前に立つと、小瓶を手にし唇を赤く塗らして、目を閉じ囁いた。

『この者に元の壮健な身を』

虹色の蝶がぶわりと飛び立ち、観衆がざわめく。蝶は白く輝くと、驚き顔の男性の身にすっと吸い込まれて消えた。すると。

「お、おとお？」

男性が松葉杖を離して両足で地を踏み締め立つ。足踏みし、飛び跳ねて、見る見る内に喜びが顔に満たされた。

「痛くねえ！ すっかりよくなっちゃった！」

その様子を見て、観衆は色めきたった。

「あたしもお願いできるかい。小麦袋を運んでいたら、腰を痛めちまって」

「うちの旦那が風邪をひいて、もう二週間咳が止まらないんだ」

「うっかり埋み火に触って火傷しちまった。治るかい？」

たちまちエレの周囲に人だかりができて、次々と注文が殺到する。

「わかりました。お聞きしますので、皆さん順番に」

アルテアの効果を目の当たりにした人々はエレを頼る。これもこの半年でお決まりになった流れだ。

一人一人の話を親身に聞いているエレの横で、赤い瞳が不機嫌極まり無い様子で見下ろしている事に、少女自身が気づかないのも。

宿に帰ってエレが最初にするのは、血の補充である。

首から提げていた小瓶の蓋を開けてテーブルの上に置くと、短剣を掌に滑らせる。滴り落ちる赤い流れが瓶を満たすまで、拳を握り締めて血を絞り出すのだ。

やがて小瓶が血で満たされると、唇に掌の血をつけ、小さく呟く。

『痛みを癒せ』

白い蝶がふわりとエレの手に宿ると、傷は跡形無く消えて、流血の痕を微塵も残さなかった。

アルテアの発動には、破神の血を持つ人間の血を唇につける事を条件のひとつとする。以前エレは『言の葉の石』と呼ばれる、血を凝縮した石を媒体としていたのだが、それは戦いの中で失われてしまった。

その代わりにエレ自身の血を媒介する事にしたのだが、発動の度に手を切ったり唇を噛み切ったりして傷つけるのは、『嫁入り前の娘がする事じゃねえだろ』とインシオンが呆れきった顔で言い放ったので、譲歩案として、数日に一度、血が凝固しない作りをしたこの小瓶に入るだけの血を注ぎ、それを使用制限とした。

今日はいつにも以上に治療すべき人間が多くて、小瓶の中の血を使いきってしまった。だがこれだ

け補充しておけば、またしばらくはもつだろう。

「……やめれば？」

憂鬱な雰囲気をまとった声をかけられて、小瓶の中で揺れる己の血を眺めていたエレは、そちらを振り返った。同室のリリムが、困ったような顔を向けている。

「あなたがアルテアで誰も彼もを癒してたら、きりが無いわよ。その内皆調子に乗って、もつと無茶な注文をつけて来るわ」

「でも、私にできるのはこれくらいです。遊撃隊の役に立たないと」

「できなくなった時に、反動がひどいって言ってるの」

リリムは溜息をつきながら、湯気を立てるカップを差し出した。カモミールの甘い香りが、気持ちを落ち着かせてくれる。

「大体、あの言い方は無いわよ。自分達を助けてくれた相手を『魔女』呼ばわり。あなたに対するイシヤナ人の見方がわかるわ」

エレはきよとんと目をみはる。そういえば、町長は『アルテアの魔女』と言っていたか。

セアクの皇女として生きていた頃は、『アルテアの巫女』として奉られていた。インシオン遊撃隊と旅をする内、エレを神聖視するのはセアクの人間だけで、半ば冷戦状態にあったイシヤナの人々には『敵国の魔女』として恐れられていた事を知り、衝撃を受けたものだ。



しかし遊撃隊の一員として各地を巡る半年で、その感覚が麻痺してしまっていたらしい。慣れとは恐ろしいもので、「そういうものだ」と無意識に納得していたのである。

「私は大丈夫です。心配してくれてありがとうございます、リリム」

礼を言いながら茶を受け取ると、リリムは紫の瞳を驚きに見開いて、たちまち頬を赤く染める。「べ、別にあなたを心配した訳じゃないわ。インシオンが不機嫌になるのが、あたし達も面倒なだけよ」

そっぽを向いてぼそぼそ洩らすその姿も見慣れた。はじめは無口でとつつきにくい少女だと思っていたが、人見知りなだけで、打ち解けてしまえば、ちよつと恥ずかしがり屋な年相応の娘だとわかる。

シヤンメルも普段は好戦的で少々常識に欠けた部分が目につくものの、性根はまっすぐだ。インシオン遊撃隊の面々は、深く付き合ってみれば人の好きがわかるのだ。勿論、隊長のインシオン自身も。わかり合えないまま別れてしまった人もいるが、彼とも言葉を重ねれば歩み寄る事ができたのではないかと、エレは考えながら茶を口に含んだ。

甘い果実に似た芳香が鼻を通り抜け、爽やかな感覚が喉を滑り落ちる。戦いと治療で疲れ果てた身体に薬草茶がじんと沁み渡る。こちらを労って薬草を選ってくれるリリムの心遣いに、エレは深く感謝した。

サシエの町外れに古めかしい酒場がある。椅子やテーブルは使い込まれて疵が目立ち、客もまばらで、それぞれがちびちびと酒をなめて、互いに干渉する事は無い。

はずなのだが。

今夜は誰もがちらちらと視線を送る相手がカウンター席に一人座って、琥珀の液体が入ったグラスを揺らしていた。波打つ茶色の髪、整った顔の中でもたつぷりと紅を含ませふくらとした唇が艶めかしい。太股を見せる大胆な服からのぞく脚はほっそりとしていて、男達の目を惹きつけずにはいられない。

こんな場末の酒場にこれだけの美女が何の用だろうか。客達の興味は、店の扉が開かれる時に鳴るベルの音で中断された。

黒装束に身を包んだ黒髪の男が入って来る。彼は迷う事無くまっすぐカウンターに向かうと、当然のごとく美女の隣に腰を下ろし、酒を注文した。

美男美女の組み合わせに、客達は「やっぱりな」という些か諦めのこもった苦笑を互いに交わして、めいめいの酒を楽しむ事に戻った。

「相変わらず調子に乗った変装しやがって」

注文したコーツ産の地酒が運ばれて来ると、黒髪の男——インシオンは軽く酒を含んだ後に、

苦々しく呟いた。

「あら。これは変装の内に入りませんわ。お仕事用の格好ですもの」

女はころころ笑いながらつまみのナッツを細い指でつまみ上げて口に運び、前歯で噛む。  
「で」

インシオンが半眼を崩さないまま女を見すえる。

「お前がわざわざ来るって事は何だ、アーキ。何かあったか」

「無ければわざわざ私が来たりしないでしよう」

アーキと呼ばれた女性は、インシオンが面倒くさそうに顔をしかめるのを見て、ことさらおかしそうに妖艶な笑みをひらめかせる。普段はイシヤナ王妹付きの冴えない侍女を演じている彼女は、その実王家お抱えの凄腕の密偵であり、優秀な戦士でもある。まともに剣を交えたらきつと互角だろうとインシオンは思っている。その機会は今まで訪れた事が無いが。

「用件は何だ」

「相変わらず、女の扱いがなっておりません事」

むすつとした顔を崩さないままグラスを傾けるインシオンに向け、アーキはふふつと微笑み返す。

「その様子では、エレ様にもその調子と見ましたわ」

「用件を早く言え」

一段低くなったインシオンの声に、「あら恐い」と形ばかり肩をすくめてみせて、アーキはふつと笑みを消し、先を続けた。

「光の君直々のお達しです。一度イナトに帰還して登城せよと」

酒を口に含んでいたインシオンの表情が、更に苦々しいものに変わった。

「あいつの状態が悪いのか」

「それはご本人に直接お訊きくださいませ」

アーキは底の知れない笑みを返して、ナッツをひとつつまみ上げると、インシオンの唇に押し付ける。

「たまには、それみたいに、笑いましたら？」

口の両端を持ち上げるような形をしたナッツを押し当てられて一層不機嫌になるインシオンに冗言を投げかけると、アーキは髪を翻して席を立った。胸を張り腰を振る、男の気を惹く歩き方を意識して作ると、悠々と酒場を出てゆく。

それを見送ったインシオンに、店主が伝票を突きつけた。

「あなたのおごりだつて、あの姉さんが言つてたよ」

インシオンはぎよつとして、伝票を奪い取るように手にして見る。大した額ではないものの、遊撃隊の懐具合を把握しての行動だろう。実にちやつかりしているものだ。

「あの女」

呪詛のように呟きながら、彼は悔し紛れにナッツを噛み砕いたのだった。

当サンプルは、2巻の物語序盤です。

この先は、本編でお楽しみください。

なお、Web版には無かった加筆エピソードが序盤にあります。

七月の樹頼 たつみ 暁

URL:<http://july.main.jp/>

Twitter:tatsumisn